＜文化財の種類　有形文化財（書跡・典籍）＞　　追加指定・名称変更

旧名称	金剛寺一切経（こんごうじいっさいきょう）
新名称	金剛寺一切経（こんごうじいっさいきょう）附（つけたり）　経箱（きょうばこ）
員　数	４４６１巻２４帖２枚附３０合
所在地	河内長野市天野町９９６番地
所有者	宗教法人　天野山金剛寺
指定年月日	令和４年３月１５日
指定番号	書第１２号
年　代	平安時代前期から江戸時代中期まで

説　明

本件は、令和３年（2021）度に大阪府指定有形文化財として指定された「金剛寺一切経」4461巻24帖２枚に、経箱30合を附として追加指定するものである。

〇附 経箱

金剛寺には、聖教や文書などを保存してきた多くの長方形の木製箱が伝わっており、その中に一切経をかつて納めていた経箱も伝存する。これらの箱は、寸法が多様であること、制作時期に幅があることなどから、中世から近代にかけて、長い年月の間に破損等による修理や新調を繰り返しながら整備されたといえる。例えば、身底裏面に「天文七季〈戊戌〉五月三日修造」の墨書を有する透漆塗箱１合や、身側面に「御社仏具一面」、身底裏面に「慶長拾一年〈丙午〉十一月吉日修理方桂坊代」と墨書する透漆塗箱１合、そして被蓋裏面に「廿二ノ内　仁和寺一音房顕證御寄進　寛文六年初春」等の墨書を記す、寛文６年（1666）に仁和寺顕證によって寄進された被蓋造素地仕上げの経箱17合などが伝わっている。

ただ、本一切経は長年にわたる保存と整理の過程において、他の聖教などと共に様々な経箱に分散して保管され、現在ではどの経箱に、どのように納められてきたのかは不明とせざるを得ない。しかし、経箱の身底裏面に「金剛寺一切経之箱〈廿ノ内〉」などと墨書する江戸時代中期の経箱19合や、身側面に「金剛寺一切経箱」と墨書する江戸時代後期の経箱７合が現存する。いずれも被蓋造の素地仕上げで、年紀はないものの墨書から一切経を納めるための経箱であったことが判明する。また、２部伝来する大般若経をそれぞれ納めた経箱も伝わっており、600巻を一

つに納めた江戸時代中期の長持形の漆塗経箱１合と、文明８年（1476）に「大般若箱」を「修復」して「大箱三」などを誂えたことを蓋裏に記す漆塗の経箱３合が現存する。この「大般若箱」３合は、猫足型の脚を６本ずつ備えた（一部欠）唐櫃で、各 200 巻を納めるようになっている。これら大般若経を含む一切経を納入するための経箱は、それぞれの時代に、一切経を後世へと大切に護り伝えるべく誂えられたといえ、金剛寺一切経の護持や伝来を考える上で一体のものと評価できる。墨書等から金剛寺一切経を納めたことが確実な経箱 30 合を附として追加指定し、一切経と共に保護を図る。なお、「金剛寺一切経」などの墨書が無い経箱も、金剛寺に伝わる経典類を納め護ってきた経箱として同様に重要であることから、参考資料として経箱の附指定目録に掲載する。

写真１　経箱　底裏面墨書「金剛寺一切経之箱　廿ノ内」

写真２　経箱　側面墨書「金剛寺一切経箱」

写真３　経箱（「大般若箱」）三合

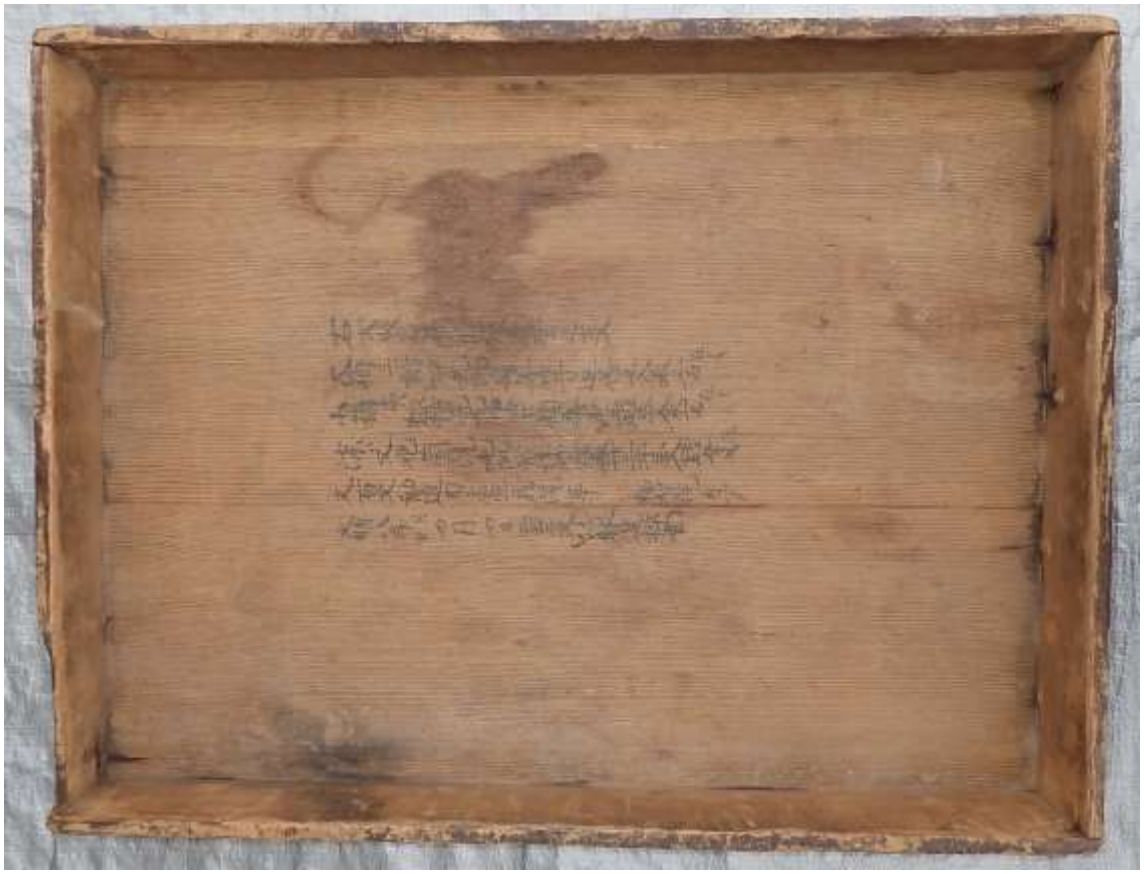

写真４　経箱（「大般若箱」）　蓋裏墨書